

# 障害者に見る啓示

## フラナリー・オカナーを読む

谷 本 泰 三

フラナリー・オカナー (Flannery O'Connor 1925-64) の作品には多くの身体障害者が登場する。その際彼女は、いわゆる差別語やタブーとされる表現を、なんのためらいもなく、ふんだんに使う。片方の足がグロテスクにいびつになった非行少年が登場する物語「足なえを最初に入れるのだ」“The Lambe Shall Enter First” (1962) などは「不快語」をそのままタイトルにしたものだ。しかし、そうだからといって、オカナーは差別小説を書いた、と決めつけてしまうことを許さない厳しさがその作品にはある。そう決めつけるには、彼女自らが不治の病に侵され、重度の身体障害者であったことと作品とをどう関連させて説明すればよいのか、という問題にも答えなければならぬだろう。文学作品を創作することと、差別問題との関わり合いについての、浅田彰の発言には聴くべきものがある。彼は言う。「文学というのは、一方では絶対的に自由でなくてはならず、しかし同時に絶対的な不自由を引き受けなくてはならない、ということなんですね。作家は何を書いてもいいけれど、いかなる言葉も差別から自由ではない以上、そのことで一瞬一瞬ひとを傷つけ、自分も傷ついているのだということをつねに意識し、その緊張のなかで書かなければならない。そのダブル・バインドを全面的に引き受けている作品だけが、優れたものになりうるわけです。」<sup>1)</sup>「絶体的」というのは割引くとして、オカナーの作品が優れているのは、それが、浅田の言う「ダブル・バインドを全面的に引き受けている作品」だからなのである。不治の病に罹り重い障害を持つオカナーは、確実に死に向かいつつある自己

を見つめながら生きた作家であった。彼女が、その苦しみを創作力の源泉としていたとしても、不思議ではない。しかし本論は、彼女の作品における障害者問題を検討することを意図するものではない。オカナーの作品は、障害者の苦しみを広く読者に訴えることを主眼としたものではないからである。

それにしても、アメリカ文学作品には何と多くの障害者が重要な役割を演じていることか。ホーソン (Nathaniel Hawthorne) は「あざ」“The Birthmark” で、美しい女性の頬に浮かび上がる小さい赤いあざを鮮烈に描き出す。優れた科学者である彼女の夫は、これを不完全性を象徴する瑕瑾であるとして、全身全霊を傾けて除去しようとするのだ。またメルヴィル (Herman Melville) は、頭から頬そして首を伝って衣服の中に消える青白いあざ、そして鯨の骨で作った義足を持つ英雄、エイハブ船長 (Captain Ahab) を創り出した。すぐに思いつくこれらの例に見るように、アメリカの想像力は著名な障害者たちを産み出してきた。そして、彼らが登場する作品の中心課題は、すぐれて存在論的 (ontological) な問題であるのだ。注目すべきことである。

今ここで論じようとしているオカナーも、障害者に重要な場を与えることによってその作品を構成している。そして、ホーソンやメルヴィルがしたように、オカナーが正面に据えて作品化したのも、存在論的課題であった。同時にはそれはキリスト教神学でいう神義論 (theodicy) であり、そして救済論 (soteriology) でもあったのだ。ここではオカナーの二つの作品「善い人は滅多に見つからない」“A Good Man Is Hard to Find” (1953) と「田舎の善い人」“Good Country People” (1955) とを取り上げて、オカナーがこれらの問題をどのように作品化したか、検討して見ることにする。

「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。」「マルコによる福音書」10:18

「善い人は滅多に見つからない」は三人の子供を持つ夫婦と年寄り一人という家族構成の、平凡で退屈な毎日を送っている一家が、全員で自動車旅行に出かけようとするところから話が始まる。車の進行とともに動き出す物語

は、祖母 (grandmother) と呼ばれているだけで、特定の名が与えられてはいない老女の言動を中心に展開する。彼女は帰ってきたときに旅行の総里程がわかるようにと、出発前に車の走行計の数字を書きとどめておく、という抜け目のなさである。「祖母」は車の周囲に展開する風景を孫たちに説明してやったり、行儀作法を教えたり、息子に運転の仕方を後ろの座席から指示したりして、終始忙しく気を配る。彼女は陽気で、人の好い人物である。また、まめまめしく世話好きで、少々おせっかいな老婦人として描かれている。やがて、「祖母」の滑稽なそして些細な不注意が重なって、車は道路脇の深い溝の底に転落する。途方に暮れているところへ、ミスフィット (The Misfit) と自称する男を首領とする三人組の脱獄囚が通り合わせる。ミスフィットの手下は、命じられて一家のものを次々と暗い森のなかに連れ込み、ピストルで射殺してしまう。その間、「祖母」は何とかしてこの殺人鬼を説得し、逃れようとする。しかし、懸命の努力の果てに、彼女は三発の弾丸を胸に撃ち込まれ、血だまりのなかに座り込むようにして死んでしまう。

この作品を批評するには、物語の中心人物である「祖母」から始めるのが順序であろう。いよいよ出発という段になって勢ぞろいする家族一同の前に現われる彼女のいでたちは、まったくたいそうなものである。白いすみれの花飾りでへりをとった濃紺の帽子、濃紺地に白い水玉模様のドレス、その襟と袖にはレースのふちどりがしてあるし、胸には香料を仕込んだすみれの花飾りが匂っている、といった具合だ。それに白い手袋だってちゃんとはめている。着飾った「祖母」と、家族のものたちのくつろいだ姿とは際立って対照的である。「祖母」のいでたちについて語り手は解説する。「事故があってこの人がハイウェイで死ぬようなことでもあれば、目撃者にはこの人が立派で、しとやかな婦人であったことがすぐわかることだろう。」(118)<sup>2)</sup> 要するに、この老女はいかにも南部の淑女と呼ばれるような人物なのだ。「祖母」は天真爛漫で、人間の善性に信頼を置き、愛情深い母性を備えた人物であるとも見えよう。しかし彼女を「善い人」と描くのはオカナーが意図するところではないようだ。むしろ、「祖母」のように善良な様子をした人間が、自

己を善しとして疑わない状態へ、われ知らずに落ち込んでしまっている様を、鋭く諷刺するのがオカナーの狙いなのだ。たしかに彼女は年寄りにふさわしい生活の知恵を備えている。しかしそれは、せいぜい交通取締警官の目を逃れる方法、といった類の、いわば生活の技術にすぎない。なるほど「祖母」は教育熱心である。孫たちに、とり散らかさないよう、また、ごみ屑を車の外へ捨てないようにと、細かい指示を与えて適切である。母親がおろそかにしている子供に対する当然の責任を、一手に引き受けているのだ。ところが、自分の生まれ故郷を悪しざまに言うのはいけない、と孫たちに教えた次の瞬間、車窓に貧しい黒人の子を認めた彼女は、「まあ可愛いちび黒ちゃん！

(Oh look at the cute little pickaninny!)」(119)と反射的に叫ぶ。この貧しい「ちび黒ちゃん」は、彼女にとっては、せいぜい絵に描いてみたくなるように可愛いものでしかない。「あの子、ズボンをはいていなかったわ」という孫娘の言葉を受けて「田舎のちっちゃな黒んぼにはね (Little niggers in the country), 私たちが持っているようなものはないのよ」(119)と、こともなげに説明している。彼女は生まれ故郷に敬意を払った昔の人は、間違ったことをしなかった、と孫たちに教えることが出来ても、掘立小屋の前にたたずむ黒人の子供の貧しさについては、何も教えてやることが出来ないのだ。そして幼い孫たちに向って何のためらいもなく pickaninny や niggers など、差別語を使う人物なのである。

昼食に立ち寄ったレストランの主人と「祖母」との対話は、彼女の倫理感や、世界観を浮き彫りにして示す。この男は、ズボンが腰骨までずり落ち、余った腹がベルトの外側に垂れ下がっている、汗かきの、見るからに人の良さそうな男である。彼は世を嘆いて言う。「善い人は滅多に見つからない。何もかもひどくなる一方だね。入り口の網戸の鍵をはずしたまんま出かけて行った時代もあったんですがね。」(122) これに対して「祖母」は、世の中が悪くなったのは、アメリカ人がみんな金の成る木を持っているとでも思っている外国のせいだ、といきまく。「祖母」は偏見にとらわれやすく、きわめて紋切り型の弁別しか出来ない人物なのだ。

なるほど、この二人は積極的に悪事を行ったり、意図したりするような人物ではない。彼らは平凡で善良な市民である。そして「祖母」は、しっかり者で、秩序を重んじ、見ていて微笑ましくなるような魅力を持ち、そのうえ、信仰心もあるように見える。しかし、そうだからといって、彼女は自己の存在に対する倫理的責任を全うしている人物である、と果して言い切れるだろうか。オカナーは、物語がすすむにつれて、生きるということの意味を根元的に考え直してみたことのない人物が、危機に際してはきわめて脆く、また醜いものであることを容赦なく浮き彫りにして行くのである。

レストランの主人は、顔見知りのない男を信用して、つけを踏み倒されたことを悔やんで、どうしてあんなへまをやったのだろう、とこぼす。「祖母」は「それはあなたが善い人だからなのよ！(Because you are a good man!）」(122)と言う。心根の優しい「祖母」の善意の言葉であろう。しかし、これは言葉の持つ意味を吟味しての発言ではない。これは即座の発言であって、言葉に付随する責任を彼女は感じていないことは明らかである。そして、後でミスフィットと対決する羽目になったとき、自分のことをミスフィットというべきではないと、と恐怖にふるえながら忠告する。「なぜならあなたは本当は善い人なんだから。(because I know you are a good man at heart.)」(128)と言うのだ。レストランの主人との時に練習してあったようなこの台詞。いかにも愚かな言葉ではないか。「祖母」は自らをミスフィットと称するような自己認識を持っていない。そんな風に自分をいうことはまったく罰当たりなことと考えている。しかしこの老女こそ、現実からはずれたミスフィットなのである。彼女は変化する世相に立ち向かう信念もなく、家族の者からさえ孤立しているのである。このアイロニーは、「祖母」と脱獄囚ミスフィットの人生に対するそれぞれの態度の間にある落差の大きさをよく示すものである。ミスフィットを「本当に善い人(a good man at heart)」だという「祖母」の不用意な言葉は作品全体のコンテキストにおいてきわめて重要な意味を持つ。そのことについては、後でもう一度この場面を振り返って検討することとする。

ところで、ここで、福音書のエピソードを思い出して見たい。永遠の生命についてイエスの教えを乞おうとして「善い先生」と彼に呼びかけた富める男の話である。このエピソードは、オカナーが示す問題を解くひとつの手がかりとなると思われるのだ。イエスは、彼の問いが誠実なものであると見抜いた。だからこそイエスは、自分に「善い先生」と呼びかけた男の言葉の真意を問うたのである。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。」<sup>3)</sup> 彼がイエスを「善い先生」と呼んだのは、確かに、尊敬と親愛の思いからであろう。しかし、彼がそう言ったのは、イエスに絶対の善性を認めていたからではない。彼がここで「善い」という語を用いたのは不用意であった。この男が日常使う言葉は、彼の弛緩した精神によって鈍磨していた。イエスの批判はそこに向けられた。相対的価値の世界から、新しい絶対的価値の世界への脱出を教えるイエスの厳しい言葉が福音書のこのエピソードをしめくくっている。

オカナーが描く「祖母」は、アメリカ南部社会の日常性の中に浸り切っていた人物である。そして、彼女が何度も口にする「善い人」という人物評は、福音書に照らしてみると、まことに空々しく、虚ろな響きをもって読者の耳を打つ。「祖母」を射殺したミスフィットは「この人を、その生涯の一瞬一瞬に、撃つ者がいたら、この人は、善い人となっていたらろう。」(133) とつぶやく。彼女が人生を危機的状況にあるものとして捉えることが出来ぬ人間であったことを、この殺人鬼は見抜いていたに違いない。

「祖母」のような価値観を支えにして生きてきた者が、己の存在意義を根元的に問い詰められる危機に直面する時、一体どうなるのであろう。事故を起して興奮状態にある者、呆然自失になった者など、うろうろしているところへ「大きい黒塗りの、ひしゃげた霊柩車のような車」(126) が近づいてくる。それは、丘の向こう側から、静かに、ゆっくりと、見え隠れしながら現われる。まるで音響を止めたスローモーションで見せる映画の場面のようなのだ。こうしてオカナーは、非日常的なものの出現を巧みに映像化している。それは死の国からの使者たちを運ぶものであるのだ。ミスフィットとの出会いは

「祖母」にとっては死との対決を意味していた。

「祖母」たちを乗せた車の進行とともに展開してきた物語の前半部は、事故を境にしてフィジカルな動きを停めてしてしまう。車が落ち込んだ深い溝の底に限定された後半部では、メタフィジカルなダイナミズムが唸りを生じて動き出すのである。そこは、無気味な暗黒が、さらにもっと不気味な「雲も無く太陽なども無い」(131) 無色が全体を支配する場所なのだ。「祖母」がいそいそと取り仕切る前半部は、一見平和な姿をした通常の現象界である。それは、「祖母」が、自分と自分の周囲の状況との間にある矛盾を糊塗しながら生きてきた世界である。彼女はその矛盾を、根元的次元において捉えようと試みたことはなかったのだ。脱獄囚と「祖母」の、交差することのない対話を中心とする後半部では、現象の世界は消え去り、読者は靈的な世界へと導かれる。そこでは、もう目を背けたり、ため息をついたりするだけでやり過ごすことのできない重大事が「祖母」に迫ってくるのだ。ミスフィットと「祖母」との出会いの場が、見通しの利かぬ深い溝の底であることは、きわめて象徴的だ。それは、日常性を有する一切のものから遮断された場所なのである。

家族全員が殺害され、ミスフィットと二人きりになったときに現われるミスフィットと「祖母」との対比は、周囲の自然に対する彼等の反応の仕方にも微妙に暗示されている。一片の雲も無いのに太陽が見えない、という異様に不気味な空模様に気付くのはミスフィットの方である。「空には雲が無い」と彼は言い、上空を見上げて「日も見えず、雲も見えずだ (Don't see no sun but don't see no cloud neither.)」(127) とつぶやく。彼等が向かい合っている深い溝の底からは、天空の限られた部分しか見えないはずだから、雲や太陽が視野に入らなかったということも十分考えられる。しかし、この風変わりな光景にミスフィットの鋭い想像力は敏感に反応した。ところが、とにかく助かりたい「祖母」には、そんなことはどうでもよいことだった。独り言のようなミスフィットのつぶやきに対して、「祖母」は即座に「そう、素晴らしいお天気」(127) と答えている。ミスフィットの虚無と「祖母」の空

しい幻想が併置され、相互を際立たせる場面である。語り手が繰り返して描写する「雲の無い空」(130) や「一片の雲も無く」そして「太陽なども無い (nor any sun) 空」(131) は血生臭さい殺人の現場を支配して、異様な不気味さを漂わせる。

精神障害をさえ疑われたこともあるミスフィットに対して、「祖母」は何をもって答えようとするのか。助かりたい一心でミスフィットに信仰を勧める「祖母」が「イエスがあなたを救うのです」と言っているつもりが満足な言葉にならず、Jesus, Jesus, (131) と繰り返すのみである。それはもう瀆神のつぶやきとしか聞こえない。<sup>4)</sup> このことは、生きることの苦しみを体験したことのない彼女のイエス信仰が、実は、そのまま罪であることを示しているのである。浅薄な自己認識しかない「祖母」がする、一見キリスト教的なモラルを盛り込んだ説教が、あらゆる人生経験を経たミスフィットに衝撃を与えるはずはない。一家のものが次々と射殺されて行く銃声を耳にしながら、溝の底で交される二人の対話を読むとき、人間存在の根元にかかわる、解決すべくもない問題と取り組む、精神障害を疑われている殺人鬼のほうが、聖日礼拝にでも出席するように着飾った「祖母」より高貴に見えてくる。まことに皮肉なことである。

オカナーはアメリカの深南部に生まれ育った。彼女は自分の作品のセッティングを深南部に据える。それはプロテスタンティズムが支配的な土地柄で、俗に「バイブル地帯」と呼ばれている地方である。しかし彼女は自分を取り巻く世界を、生き生きとした信仰を喪失してしまったものと見ていた。「善い人は滅多に見つからない」の「祖母」はオカナーが見ていた南部の現実を体現する人物なのである。

オカナーの作品にはコミカルな要素があって、それが一つの特徴となっている。オカナーは、ダイナミックな霊性を喪失した社会に疑いを抱くこともなく生きる人間をカリカチュアにして見せるのだ。「祖母」がそうだ。オカナーが描いて見せる愚かな人間がかもしだすおかしさや、そのグロテスクな様を見ているうちに、読者はこの作家の鋭利な筆が剔出して見せるのは、ひ



とりアメリカの南部社会だけの問題ではないことに気付くのである。自らをミスフィットだと称する精神障害者が、危機的な問題を提起することによって、オカナーの作品の持つ意味は一気に広がる。

生きながら死を体験している脱獄囚ミスフィットが抱える障害は、彼の内部深くに根を張っている。彼を死に至らしめる内的障害は、これを避けて通ることは許されない問題であり、後で詳しく論ずることとして、ここでは外的障害を持つ女性が中心人物となっている作品を次に検討して見ることにしよう。

「神の業がこの人に現われるためである。」「ヨハネによる福音書」9：3

「田舎の善い人」の主人公は重い障害を持つ人物である。10歳のとき事故で片脚を失って以来、義足での生活を強いられてきた32歳の女性である。そのうえ彼女は心臓に疾病を持ち、せいぜい45歳までの命と医者に宣告されている。彼女の母親ホープウエル夫人 (Mrs. Hopewell) は、離婚して女手ひとつで娘を育ててきた。母は、わが子ジョイ (Joy) を不憫に思い、楽しいカレッジライフをと願って、大学に進学させる。平凡な人生でよい、幸せになってくれ、と願う母の期待を裏切って、彼女は母が思いもかけぬ哲学を専攻、研究に没頭し、Ph.D. まで取得してしまう。そして母に相談もせず、名前をハルガ (Hulga) と変えてしまう。大学で講義したい、という願いもかなえられず、ジョイ・ハルガは、小農場を経営する母と無意味な日々を送っている。若い男を愚劣そのものと見ている彼女の前に、いかにも朴訥で田舎者らしい男が現われる。19歳という触れ込みで、マンリー・ポインター (Manley Pointer) と名乗る男だ。ミショナリーになりたかったが、今は家から家を訪ねて聖書を売り歩いていると言う。純情可憐とみえるこの男は、母子家庭に育ち心臓に疾患を持つと言う。ジョイ・ハルガと同じ境遇の身の上話しをしてホープウエル夫人に取り入る。ジョイ・ハルガは終始彼を小馬鹿にしていたのだが、翌朝彼とデートするのだ。前夜、彼女はデートの成り行きについて思い巡らせる。結論は、彼を誘惑した後で、後悔は無用、これ

が人生、と教えてやる、というものだった。しかし、薄暗い納屋の中で二人きりになった時、彼はしたたかな女たらしに豹変する。彼女の義足を詐取して立ち去る男を、ジョイ・ハルガは呆然と見送る。

語り手はジョイ・ハルガが醜い女であることを強調する。彼女は Joy という名を改めようと思ひ立ち、出来るだけ醜悪な名を、と考え抜いた挙句、Halga と改名する。彼女は「大きく不格好」(237)で「ひっきりなしに腹をたてているので無表情な顔」(237)になっている。その「氷の様な青い目」(237)は「意思の力で目が見えない状態を作り上げることをやり遂げ、しかもその状態を維持しようとしている人のような」(237)目であると語り手は言う。6年間も着古したスカートと色あせた、カウボーイの絵のついたトレーナーを変えようとしな。起床してバスルームに入る時、朝食の準備をしている母の耳に響くようにドアをけたたましく開閉するのである。ジョイ・ハルガは義足を打ちつけ、わざわざ騒々しい音をたてて家の中を歩く。これなど、詐欺師マンリー・ポインターが「木の脚 (wooden leg)」(283,288)と呼ぶその義足を、できるだけ醜悪なものに見せるためのデモンストレーションとしか思われな行動である。ジョイ・ハルガは、自分をことさら醜く見せる努力をしているのだ。

この義足はジョイ・ハルガの分身なのである。ホープウエル夫人が農場を見回る時、娘に同行を頼むと、「私が要るの。そう、それならここにいるこれ、これが私よ！ (If you want me, here I am—LIKE I AM!)」(274)とわめいて「木の脚」をぐいっと突き出して見せるのだ。彼女は10歳のときに片足を失って以来、「木の脚」をグロテスクに見せびらかすことを拠り所として生きてきたのだ。彼女はそれを自己防衛の楯とし、他を攻撃する武器としていたのである。「木の脚」はまさに彼女の自己存在を証するものなのである。

ところで、純情可憐な風情で登場するマンリー・ポインターだが、実は、彼は邪悪なるものの化身なのだ。オカナーは、読者がそう解釈するのに十分な暗示を用意している。彼がジョイ・ハルガの義足を奪った時その目は、

「二本の鋼鉄のスパイクのよう」(289)に光るのだ。悪魔的超自然性を暗示する比喩である。彼はキリスト教文化圏で成立した悪魔伝説につながる人物なのだ。先ず、実年齢が不祥であることが挙げられよう。彼は19歳という触れ込みだが、ジョイ・ハルガとの最終的なやり取りで「俺は昨日今日生まれた青二オじゃあない」(290)と言う。マンリー・ポインターと名乗るが、もちろんこれも嘘。「木の脚」を奪われて立つことができなくなったジョイ・ハルガに「俺を捕まえようたって駄目だぜ。ポインターは俺の本名じゃないんだ。おれは行く先々で名を変えるんだ。」(291)とうそぶく。悪魔伝説では「暗闇の王」,「誘惑者」,をはじめ、ほとんど無数とも言える呼称が悪魔に与えられてきた。もちろん悪魔は「いかさま師」,「偽り者の父」としての地位も確保している。<sup>5)</sup> また悪魔は破壊活動を実行する度に、それぞれの場に応じて変貌する。<sup>6)</sup> 「田舎の善い人」ではジョイ・ハルガの人格を破壊してしまう悪魔は、口ごもりながら訥々と身の上話をするバイブルセールスマンの姿をとって登場するのである。田舎弁まる出しの彼は「クラスチャン(Chrastian)の仕事に献身したい」(279)と言う。訛っての発音だが、感性鋭い読者は「破壊する(crush)」の含意を聞きとることだろう。オカナーの隠し味は辛口好みの食通には香辛料十分といったところだ。

さて、悪魔はジョイ・ハルガの義足に目をつける。「木の脚なんだね。あんたは本当に勇気があるんだね、素晴らしい人だ。」(283)と言われてジョイ・ハルガはデートの約束をしてしまう。しかし、その場になっても彼女は、なお冷静さを保っていると思っている。生まれて初めての、それも何度も繰り返しされるキッス。それでも彼女は自分にキッスする男を、距離をおいて、面白がって、そして哀れみさえ抱いて観察する余裕があった。しかし義足のことを「これがあるから、それであんたはほかの人と違うんだ。」(288)と男が囁くとき、語り手は、「この少年は直感力で彼女の真実に触れたのだ。」

(289)と言う。ジョイ・ハルガはそれまで人から賛辞を与えられたことが無かったに違いない。彼女は、マンリー・ポインターが自分の生き様を褒め、それをユニークであると認めたことに感動したのだ。しかし語り手の真意は

別のところにある。語り手の言葉は、ジョイ・ハルガの内なる現実を鋭く指し示すものであるのだ。ジョイ・ハルガは自分に障害があること、すぐれた才能が認められないこと、低俗な連中に混じって、民度の低い僻地に埋没しての毎日、そして抑圧された性、それらのフラストレーションをこの義足に集約し、肩肘張って生きてきた。マンリー・ポインターが「直感力で彼女の真実に触れた」という語り手の言葉少ないコメントは、「木の脚」と「彼女の真実」とを連結し、ジョイ・ハルガの生き様を暗示する。ジョイ・ハルガと語り手の間にあるこの落差は、ジョイ・ハルガの問題を浮き彫りにして見せるオカナーの巧みなアイロニーの手法なのである。悪魔はこの落差の裂け目に手をかけ、ジョイ・ハルガの人格を引き裂くのだ。

ジョイ・ハルガの砦「木の脚」を悪魔が狙もう一つの弱点が彼女にあった。抑圧された彼女の性である。たまに散歩に出ることがあっても、一日のほとんどを読書に費やすジョイ・ハルガは、犬、猫、小鳥、花、自然、そのいずれもを嫌っていた。特に素敵な若者は嫌いで、見ただけでその愚劣さを嗅ぎつけた。雇い人フリーマン夫人 (Mrs. Freeman) が、15歳で結婚している娘の妊娠の容態や、18歳になる上の娘の男性との様子など、詳細に語るのを、ジョイ・ハルガは疎ましく思っている。しかし、フリーマン夫人の話は、彼女の性的フラストレーションの一因となっていたに違いない。そして、男の性を暗示するマンリー・ポインターという名をかたる悪魔が現われるのである。マンリー・ポインターはジョイ・ハルガに彼の愛の告白に応ずるべきだ、と執拗に迫る。ジョイ・ハルガは誘惑戦略が功を奏したと勘違いし、遂に、応じてしまう。悪魔伝説に付き物の悪魔との契約 (Devil-Compact)<sup>7)</sup> の成立である。そしてきわめて性的な衝撃シーンの展開となる。彼はジョイ・ハルガの返事を聞くや否や、証拠を示せ、と要求する。「木の脚」がつながっているところを見せろ、と彼女の耳に唇をつけて囁くのだ。そして彼女はこの「猥褻な誘い (the obscenity of the suggestion)」(288) に乗ってしまう。そして彼女は「まったく彼に身を任せてしまい、生命を喪失したが、奇蹟的にも彼のなかに再びそれを発見した」(289) ような具合となる。彼は「実に

やさしくスラックスをめぐり上げ始めた。白い靴下と平たい茶色の靴に収まっている義足には厚いキャンバス地の布が巻つけてあり、上のほうは脚が切り株になっているところで、醜くつながっていた。」(289) 彼女は駆落ちをし、毎晩彼に義足をはずしてもらい、毎朝またそれを着けてもらう場面を想像して、彼に脱着の仕方まで教えてしまうのである。他人の目に曝したことのないプライバシーに彼が立ち入ることを許したジョイ・ハルガは、この時まで自己の尊厳が凌辱されることを、予想もしていなかったのである。マンリー・ポインターは聖書がぎっしり入っているはずが、実はほとんど空の鞆の中にジョイ・ハルガの「木の脚」を入れてしまう。そして取り出した一冊の聖書は中をくりぬいて空洞になったもので、そこには裏面に猥褻な絵を印刷した一揃いのランプと、ウイスキーのボトルと、「この製品は性病予防用のもの」(189-90) と印刷された箱が入っていたのだ。「木の脚」を失って立っていることができず、呆然となったジョイ・ハルガをしり目に、つばの広い帽子をかぶったまま、男は納屋の穴から抜け出して消えて行く。こうしてオカナーは、ジョイ・ハルガの処女性喪失を暗示しつつ、同時に悪魔に蹂躪された人間性を見事に映像化するのである。

さて、「木の脚」のほかにもう一つ、ジョイ・ハルガが拠り所としていることがあった。哲学専攻で Ph.D. の学位を持ち、大学で講義する能力があると彼女が自負する知性、これが悪魔の攻撃に曝されることとなる。彼女は、自分が得た知識と、自分が行った思索によって得た結論に信念を持っていた。ホープウエル夫人は、娘が読みさして置いてある本を開いてみると、下線がしてある箇所に出くわす。「科学はそれが真摯なることを再び主張しなければならない。そして、実在するもの (what-is) だけと、かかわりを持つことを宣言しなければならない。無、それは科学にとって恐怖と幻想以外の何でありえようか。科学が正しいとすれば、一つのことが揺るぎないこととなる。すなわち、科学は無については何も知りたくはない、ということである。これが無に対する厳密な科学的姿勢である。無について何も知ろうとしないことによって人はそのことを知る。」(277) ジョイ・ハルガが下線を引いた

この文章は彼女の信念を代弁していると考えてもよいだろう。この間の事情をコメントした鋭い批評がある。それは、ジョイ・ハルガは存在しない Nothing については何も知らないで置く、と考えているだけでなく、存在する Nothing についても知らないままにしておく、と言うのである。<sup>8)</sup> この実証主義的不可知論によって武装していたジョイ・ハルガは、皮肉にもその武器を逆手にとる悪魔の餌食となるのだ。

ジョイ・ハルガの不可知論は、一見実証主義に支えられているように見える。しかし、それは本質的には実証主義とは無縁なものなのである。経験から得た事実<sup>9)</sup>に依拠せぬものを全て排除し、確実に経験できる事実のみに立脚する科学である実証主義だが、彼女の場合、それは読書から得た知識であって、確実な体験に基づくものではないのである。マンリー・ポインターとのデートの手順を、ほとんど寝ずに頭に思い描いてみても、それは、体験を基にして組み立てたものではない。なるほど、現実の場では、うまく行くように思えた。しかし、結局は、シミュレーションで得たものと全く異なった成り行きとなる。納屋でマンリー・ポインターに眼鏡をとられてしまったジョイ・ハルガには、外の牧場風景が緑の池のように見えた。裸眼による錯覚である。平素、周辺の景色を観察したことがなかったので、気付かないのだ。厳しく科学的に状況判断する目を持たないジョイ・ハルガが、ここで愛についてマンリー・ポインターに言う。「わたしは幻を見ないの。わたしは何事も見抜いて無を見る人なんだから。(I don't have illusions. I'm one of these people who see *through* to nothing.)」(287) 眼鏡をとられ、周囲のものははっきりと識別することができなくなった状態での台詞である。オカナーがイタリックを伴って表記するジョイ・ハルガの言葉は、語っている本人の観念的実証主義を、見事にカリカチュアライズして見せる。

使い古されたキリスト教的決まり文句を口にし、純情で無垢、まるで幼い少年のように振る舞うバイブルセールスマンが、海千山千の悪魔の化身であるとはつゆ知らず、ジョイ・ハルガは彼に、実体験に裏打ちされていない虚無の哲学を説く。それに対して彼は「あんたは救われていないんだね」(286)

と尋ねる。答えて彼女は、救われているのは、神を信じていない自分のほうであって、地獄の罰を受けているのは、なにも知らないマンリー・ポインターなのだと言う。ところが、脚を詐取してしまうとマンリー・ポインターは豹変する。そして彼は堂々と言い切る。「わしは聖書を売りこそすれ、そんなものは信じちゃいないんだ。」(290) そしてさらに言う。「ハルガさんよ、おまえさんは賢くないんだよ。わしは生まれてこのかたずうっと無を信じていたんだぜ。」(291)「木の脚」を詐取された瞬間、哲学博士と田舎の少年という立場が一気に逆転するのである。

超経験的現実を「幻」だと言うジョイ・ハルガであるが、彼女は偶像崇拜者であった。彼女が自己存在のあかしとする「木の脚」こそ彼女の偶像であったのだ。ジョイ・ハルガは「木の脚」をだれにも触れさせない。ひそかに自分で触れるときは、「人が自分の靈魂に対するときのようにそれを大切に扱っていた」(288)と語り手は言う。彼女は「木の脚」をほとんど神聖なものとしているのだ。実在する万象を実在たらしめている実在、つまり神の存在を真っ向から否定するジョイ・ハルガが、実は偶像崇拜者であるとは、如何にも皮肉な取り合わせではないか。自我を主張してやまないジョイ・ハルガは「木の脚」が象徴する彼女の自我を絶対化してしまっていたのである。

ここで、心身の障害についてのイエスの姿勢を見てみよう。生まれつき目の見えない人を指して「だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。」と問う弟子たちにイエスは答えて言う。障害は「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現われるためである。」<sup>9)</sup> 苦難の因果を尋ねるな、その目的を見つめよ、とイエスが勧める信仰<sup>10)</sup>はジョイ・ハルガのものではなかった。彼女は、ひたすら自分の運命を呪い、それをエネルギーとして生きてきたのだ。そして、聖書を空疎であると確信していたのだ。ところが聖書を、つまりイエスの福音を売りに来たと称する悪魔に敗北することとなるのである。偶像の喪失は、しかしながら、ジョイ・ハルガの開眼への道につながることになろう。したがってそれは、悪魔の勝利が一時的なものであるにすぎないことを予測させるも

のであるのだ。

ジョイ・ハルガが拠り所とする身体的障害や、哲学専攻で Ph.D. の学位を持つ彼女の知性は、意識下に潜む性的願望と共に、彼女を滅ぼそうとする悪魔が利用する彼女の弱点となっていることを見てきた。そしてオカナーの悪魔が残忍で、巧みで、グロテスクであることも見てきた。しかし、オカナーがこの作品で描き出す、ジョイ・ハルガを取り巻く状況の内的現実はさらに疎ましく、悪に汚染されたものなのである。ホープウエル夫人は32歳になる娘が、生まれてこのかた「一度たりともダンスのステップ踏んだこともないし、正常な楽しい時 (*normal good times*) を過ごしたことがない」(274)のを不憫とし、心を痛めている。ジョイ・ハルガを大学に進学させたのも「正常な楽しい時」を彼女に体験させてやりたかったからであろう。しかし、オカナーがイタリック体で *normal* と表記するその「正常」な生活こそ「障害」であり得るとする彼女の逆転の構造を示す好例をここに見るのだ。オカナーは障害者の苦しみや悲しみの外にあるいわゆる「健常者」の世界が、靈性を欠くものであり、「健常」からはほど遠いものであることを、全編を通じて浮き彫りにしてみせる。ホープウエル (Hopewell) という樂觀主義をそのまま自分の名に持つジョイ・ハルガの母親は、気の利いたような台詞をいつも用意していて、当面する問題への解答とし、当意即妙の技であると自負している。彼女はフリーマン夫人と、どちらが先にそのような名文句を思いついたか、と張り合っている。ジョイ・ハルガならずとも、うんざりさせられる陳腐な台詞の独創性を主張しあう二人は滑稽である。聖書からの引用もホープウエル夫人の在庫品だ。フリーマン夫人たちを「田舎の善い人達」と評価するホープウエル夫人は、「そうよ、田舎の善い人達は、地の塩なのよ! (Why!... good country people are the salt of the earth!)」(279)とも言う。イエスが弟子たちを「地の塩」であるとしたのは、彼らがこの世に健全な味付けをするものとして不可欠なものであれ、という願を込めたからであった。<sup>11)</sup> ホープウエル夫人が「田舎の善い人」であると評価し、「地の塩」であると評価する「健常者」たち、つまりこの世に健全な味



付けをするものとして不可欠な「地の塩」であるとホープウエル夫人が評価する人たちは、腐敗のただ中であって、その意味を知ることがない。ホープウエル農場で「悪臭 (evil smeling)」(291) を放つ玉葱を引き抜く作業をしているフリーマン夫人を描いて物語は終わっている。この作品のタイトル「田舎の善い人」はまことに皮肉な響をたてて読者の胸を打つのである。

「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。」

「マタイによる福音書」5：6

ここでもう一度ミスフィットの問題に立ち戻って彼の持つ障害の本質について考えて見ることにしよう。

「善い人は滅多に見つからない」には「田舎の善い人」で見た対立構図はない。「祖母」とミスフィットが示すのは、それぞれが持つ、あるいは持たない、問題を、鮮明に際立たせながら最後まで交わることのない平行線という構図である。本論の初めの部分では論点を「祖母」に集中した。だが、「祖母」と対照的な線を描いて作品の後半部を貫いているミスフィットに焦点を当てなければ、議論が一面的なもので終わってしまう。彼は極めて鋭敏に現代文明の矛盾を見つめている人物だからである。

波乱万丈の人生を送ってきたミスフィットは、若かった頃、父親が自分について言っていたことを思い出す。「人生について何も問うてみもせず一生を終える奴と、何故なんだ、とそのわけをどうしても知らなきゃおさまらない奴と、二通りの人間がいるもんだ。こいつはその後のほうなんだ。こいつはこれから、何んでもかんでも頭を突っ込んでみるこったろう。」(128-9) ミスフィットは、父親が見ていたとおり、止むことのない放浪の人生を送ることとなる。それは探究の人生でもあった。彼は「祖母」に自分の経歴を語って聞かせる。ゴスペル・ソングの歌い手、陸海両軍、それも内地勤務も外地勤務も経験したと彼は言う。結婚は二回、葬儀屋もしたし、鉄道でも働き、大地を耕したこともあり、竜巻に襲われた経験もある。女がリンチされるのを目撃したこともある。

このような激しい人生体験から、彼が引き出したものは一体何か。それは二つの問題に集約されるだろう。すなわち、この世の不条理性と永遠の命という問題である。

狭い独房の天井と床、そして壁。四方八方を閉ざされ「生き埋め (buried alive)」(130) にされたのは、一体どの様な罪の報いなのか、と彼は問い続ける。彼がミスフィットと自称するのは、自分の行為と、その結果として引き受けねばならない重荷との間に、どうしてもバランスを見出すことが出来ないからなのだ。まるで辻褃の合わない請求書を突きつけられて決済を迫られる男のようだ。だから彼は決心したのだ。放火殺人の犯罪行為を重ねてやろうと。言い換えれば、社会が考えている秩序のバランスを突き崩してやろう、という考えである。先の譬えにしたがえば、帳尻を合わせるため、支払に見合うだけのことをやってのけようというわけだ。しかし、己の行為とそれを咎める周囲の基準との間にずれがあって、思わぬ責任を取らされたり、己に対する運命の、或いは神の、仕方が公平を欠いている、という不満は、大なり小なり、われわれが体験するところではないか。だがミスフィットは理屈にあわない運命に挑戦する男だ。彼は公平を欠いた取り決めを是正させることは出来なくても、それに見合うだけのことをやって帳尻を合わせようとするのだ。こうして犯罪を繰り返すこととなる。まるでシジフォスである。刑罰として、坂の頂点から落下する巨石を、繰り返し繰り返し頂点へ押し上げる作業を科せられるギリシャの神のように、ミスフィットは空しい努力を続けてきたのだ。

ミスフィットのように、不均衡な運命を自分のやり方で回復しようとする生き方にしたがえば、やがて脱出不可能な泥沼に足を踏み入れることになろう。殺人や放火を繰り返しても、何の楽しみもない、とミスフィットは言う。射殺した老女の死体を前にして、「人生には本当の楽しみなんてないんだ。

(It's no real pleasure in life.)」(133) という彼のつぶやきがこの物語を締めくくっている。まことに苦しみに満ちた結末である。この台詞は、あとで見て行くように、イエスの福音の真実性を願いながら、不信の泥沼から

どうしても這い上がることのできない男の、絶望的な心のさまをよく表現している。

この袋小路から脱出する起死回生とでもいうべき策はないのか。ミスフィットは自分の決断が、決定的な解決への道でないことを知っていた。だからこそ、彼はここでいま一つの問題を提起するのだ。それは、永遠の命に関する問題だ。「祖母」が助かりたい一心でミスフィットを説得しようとして、「イエス様、イエス様」(131)と言う。それを受けて、ミスフィットは独白する。「あの方は一切合財の釣合をへっくら返してしまいなすった。(He thown everything off balance.)」(132) イエスこそが、既成のバランスを突き崩し、しかもこの袋小路から脱出する道をつくり出す仕事をやってのけた人であったのかもしれない、とミスフィットは考えている。彼は言う。「イエス様だけが死人を蘇らせたお方だ。(Jesus was the only One that raised the dead.)」(132) しかし、すぐに、イエスは間違っていたのではないか、という疑問が湧いて出て彼の心を暗くする。そして「そんなこたあやってもらいたかなかった。(He shouldn't have done it.)」(132) と言うのだ。

彼はここで決定的な次元に踏み込んで行く。そして、イエスによる死の超克は真実なのか、という問を放つのである。イエスによる永遠の生命が真実であるとすれば、彼がこれまでに試みてきたこと、つまり、犯行を重ねることによって不均衡に傾いたバランスを平衡に戻すという試みは、まったく無駄であったことになる。イエスが「言いなすったことを、本当にやんなすったのなら、」と彼は言い、言葉を続けて、「そうなりゃ全部投げ捨てて、ついて行くしかない。(then it's nothing for you to do but throw away everything and follow Him.)」(132) と言う。だが、もし、イエスが、言ったことを実行しなかったのだとすればどうなるか。何の楽しみもない犯行を続けるのみだ。脱出不可能な袋小路での空しい努力の人生しか残されていない、とミスフィットは考える。彼がイエスによる復活の真を問うのは、この不安に由来するのだ。様々な体験をしてきた男が一つだけ、それも決定的なことを見届けていなかった。イエスによる復活の奇蹟である。ところが

「祖母」はここでつぶやく。「あの人は死者を蘇らせたりなんかしなかったのかも。(Maybe He didn't raise the dead.)」(132) 逃れたい一心で、ミスフィットに調子を合わせてこぼれ出た台詞であろう。しかし、この信仰破棄の言葉は危機の時であればこそ、こぼれ出たのである。間髪を入れず、ミスフィットは、地面を激しく殴りつけて叫ぶ。「俺には言えない。そこにいなかったのだから。そこにいなかったのは間違いだった。」(132) 痛恨の極みである。自らの目で復活を確かめることが出来ない彼は、さりとて徹底した不信に走ることも出来ない。イエスを否定しつつなおイエスを求める男は、一見学問に携わっている人物かと思わせる白髪まじりの風貌だ。この殺人鬼の眼鏡の奥に、神を喪失し、自己を喪失した現代人の苦悩が秘められていることに読者は気付くのである。

ここで思い起こすのは山上でのイエスの説教である。彼は言う。「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。」<sup>12)</sup> ミスフィットこそまさに「義に飢え渴く」者としてイエスに招かれている人ではないのか。彼が問うのは、「義」とされるにはどうすればよいのか、という救済の問題である。同時にそれは、神の「義」とは何か、という問いでもある。そして、これらの問いの延長線上には、さらに厳しい神議論的課題が浮かんでくる。それは、この不条理な宇宙に果たして神の「義」はあるのか、という問題なのだ。これらはいずれも「祖母」には無縁のことであった。

「祖母」とミスフィットとの、互いに交差することがない並行線上の対話を見ていると、旧約聖書の『ヨブ記』の場面が彷彿とする。ヨブと彼の友人たちとの対話である。ヨブは理不尽としか思えない言語に絶する苦しみを味わう。自分に加えられた苦しみの意味を問うヨブに対して、彼を慰めにきた友人たちが発する月並みな諫言にヨブは反論する。実は、それは彼らへの反論ではなく、彼らの頭越しにヨブは神に対して、その「義」を開陳せよと迫るのである。ミスフィットもヨブがしたように、「祖母」の頭越しにその場に見えない存在者に対して、苦しみを訴えているのだ。二人の対話が交差しないのは当然のことなのである。「義に飢え渴く」ミスフィットはその苦し

み故に、さっさと信仰を否定してしまう「祖母」より高貴に見えてくるのだ。彼女は信仰否定を表明する場面より少し前に、ミスフィットに「あなたは本当は善い人なんだから (because I know you are a good man at heart.)」

(128) と不注意にも口走ったことを読者はここで苦い思いと驚きをもって思い出す。ミスフィットは「本当は善い人 (a good man at heart)」なのかもしれない、という驚きである。そして読者は、「祖母」の不注意な言葉に託したオカナーの巧みなアイロニーの手法に気付くのだ。

「義に飢え渴く」ミスフィットではあるが、悲しいかな、彼は実体験が欲しかった。身体的体験として把握できないイエスの福音を、それゆえに信じることが出来ないのである。そして、幼児から赤子に至るまで、一家全員が射殺され、その死体を呑みこんだ暗い森と、白昼夢を思わせるような太陽の無い空が支配する最終場面となる。それは、神を失った現代をよく表現するものである。

オカナーはある座談会で、南部社会に対する彼女の姿勢を問われたとき、舞台を南部に限定して作品を構成することについて説明して、自分は南部社会を描写しているのではない、と言い切る。南部のことを書くのは、そうすることによって西洋文明の全体を示すのが目的だ、と言うのである。“I don't feel that I am writing about the community at all. I feel that I am taking things in the community that I can show the whole western world.”<sup>13)</sup> また別のインタビューでホーソンと自分の作風を比較して見せる。

“I write 'tales' in the sense Hawthorne wrote tales . . . . I'm interested in the old Adam. He just talks southern because I do.”<sup>14)</sup> と言う。ホーソンは人間存在の根源に関わる問題を念頭に置いていた。自分もそうだ、と言うのだ。違うのはその問題を体現する人物、つまり「the old Adam」が、自分の作品では南部の言葉をつかうこと。「それは私が南部の言葉をしゃべるからなの。」と言う。ウイットも豊かに明かしてくれた著者の姿勢と意気込みである。オカナーは、南部の支柱である伝統的なキリスト

教信仰が、今はまったく空洞化してしまい、見せかけだけのものにすぎないと見ていたのだ。彼女の作品は、ぽっかりと口を開いた不気味な虚無の空洞の如きグロテスクな姿を見せる。しかし、その中にはキリストに取り憑かれた「義に飢え渴く」魂のうめき声が充満しているのだ。この状況はひとりアメリカの南部に特有の現実ではない。もちろんオカナーの作品は南部抜きでは成立しない。しかし、ミスフィットやジョイ・ハルガが体現するのは、もはや一地方の現実をはるかに超える普遍性を持つ問題、the Old Adamにかかわる問題なのである。

オカナーが、本論で取り上げた二つの作品を発表した50年代、アメリカは経済、政治、軍事の全てにおいて世界をリードし、国内的にも最盛期にあった。しかし、オカナーは、空前の繁栄を享受するアメリカの内的実態を看破していた。それは生きた信仰を失い、靈性に満ちた活力を喪失した混沌であったのだ。オカナーは自分が見たアメリカの内的現実を、陰影の深い物語として顕示したのだ。彼女を預言者的作家と位置づける所以である。オカナーの作品は、アメリカの一地方から合衆国全体に及び、さらに「神の死」を体験した現代西洋文化の下にある人間の危機的状況にまで及ぶ広がりを持つと言ふべきなのである。

## 註

- 1) 「筒井康隆氏はやはり間違っている」『諸君!』(1994年7月号) 51。
- 2) オカナーの作品からの引用は全て *Flannery O'Connor: The Complete Stories* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971) によることとし、訳出しておいた。引用のページ数を示しておく。なお必要に応じてテキストを訳出文の後に示しておく。
- 3) 「マルコによる福音書」10:18 以下聖書からの引用はすべて「新共同訳」による。
- 4) 「出エジプト記」20:7
- 5) Maximilian Rudwin, *The Devil in Legend and Literature* (La Salle, Illinois: The Open Court Publishing Co, 1959) 26-34.
- 6) Rudwin 35-53.

- 7) Rudwin 169-221.
- 8) Miles Orvell, *Flannery O'Connor: An Introduction* (Jackson & London: the Univ. Press of Mississippi, 1991) 137.
- 9) 「ヨハネによる福音書」 9 : 2-3
- 10) Raymond E. Brown, "Notes" *The Anchor Bible: The Gospel According to John* (Garden City, New York: Doubleday & Company, 1985) 371.
- 11) 「マタイによる福音書」 5 : 13
- 12) 「マタイによる福音書」 5 : 6
- 13) "Recent Southern Fiction: A Panel Discussion," *Conversations with Flannery O'Connor*, Ed. Rosemary M. Magee (Jackson & London: the Univ. Press of Mississippi, 1987) 70.
- 14) Gerard E. Sherry, "An Interview with Flannery O'Connor," *Conversations with Flannery O'Connor*, 98.

## What the Handicapped Reveal Reading Flannery O'Connor's Fiction

Taizo Tanimoto

In Flannery O'Connor's stories the handicapped often enact controlling roles. They cut contrasting figures with the "normal" who are often blind to the O'Connorean truth. Though O'Connor relentlessly describes the realities of the handicapped, she is not so much interested in dealing with social justices as she is in the ontological problems and topics treated in such theological discourses—theodicy, and soteriology.

A detailed examination of the texts of "A Good Man Is Hard to Find" and "Good Country People" is to show Flannery O'Connor's prophetic messages couched in her stories.

O'Connor saw a horrible void beneath the surface of the seemingly Christian society of the South—the setting of her fiction. In her work she poignantly ridicules the credulity of the "normal" who do not realize that theirs are the spiritually vacuous lives. The discrepancies between their words and acts are satirized.

Sharply contrasting with the "normal," the internally handicapped and the spiritually disturbed, such as the Misfit in "A Goodman Is Hard to Find," remind the reader of Job, an Old Testament hero, who challenges a silent God demanding to know the reason of his sufferings. Some of O'Connor's characters are to be looked at as one of "those who hunger and thirst for righteousness," though they



fail to accept Christ's invitation.

When O'Connor dramatizes the agony of a soul that sees the universe to be a void, she shows a grotesque state of chaos that dominates over her fictional world. Thus the setting of her fiction implies more than just the Southern society. What we read is the condition of man in the modern western civilization that has proclaimed the death of God. Here we meet Christ-haunted ghosts who yearns for the reality of Christ's gospel but is never able to come out of the chaotic depths of unbelief.